

「連」のエスノグラフィー

－阿波踊りの文化人類学的研究に向けて－

An Ethnography of the 'Ren': Toward the Construction of Cultural Anthropological Approach to the Awa Dance Festival.

高橋 晋一

Shinichi TAKAHASHI

1. はじめに

阿波踊りの歴史や起源についてふれた論考は少なくない⁽¹⁾。確かに、文化史的な見地から阿波踊りに関する史料を掘り起こすことには大きな意味がある。しかしそれに比して、現在目の前で行われている阿波踊りに関する実証的な研究となると、その数は決して多いとは言えない⁽²⁾。現代の阿波踊りの実態を、踊る側の（内側からの）視点を含め、社会的文脈をからませながらインテンシヴかつ複合的に論じたものは、皆無に近い状況である⁽³⁾。これは、従来の阿波踊り研究が、地域史・郷土史研究的な視点から脱却できていないことの一つの証左でもある。

本稿では、阿波踊りの社会・文化的側面からの研究の第一歩として、阿波踊りの担い手集団である「連」の社会構成や活動の実態を記述した上で（それはすなわち連のエスノグラフィーを書くという行為でもある）、その社会集団としての特徴を明らかにしたいと考えている。しかし、一言で「連」と言っても、有名連・企業連・学生連・地域の連などさまざまなタイプのものがあり、集団の持つ性格もかなり異なっている。ここでは阿波踊りのいわばセミプロ集団である有名連（現在の観光化した

(1)最近のものでは、三好昭一郎・檜瑛司『阿波おどり』（徳島新聞社、1980年）、松本進「阿波踊りの歴史」（石躍胤央・高橋啓編『徳島の研究7 民俗篇』清文堂、1982年、1 - 45頁）、高橋啓「近世徳島城下の『盆踊』考」（『史窓』24、1994年）、三好昭一郎「徳島城下盆踊史料の研究」（『史料の輝き－阿波徳島の歴史とともに』三木安平氏古希記念論集刊行委員会、1996年、29 - 76頁）、三好昭一郎『阿波踊史研究』（徳島県教育印刷、1998年）、『阿波おどり研究』（阿波おどり研究会、年刊、1993年 - ）所収の諸論文などがある。

(2)中でも徳島大学の中村久子による一連の研究が目される（中村久子「阿波踊りにおける多様性について（その1）」『徳島大学総合科学部健康科学紀要』3、1990年、1 - 17頁、同「阿波踊りにおける多様性について（その2）」『徳島大学総合科学部健康科学紀要』4、1991年、1 - 15頁、同「新聞記事に見る戦後の阿波踊り－演舞場の成立を中心に」『徳島大学総合科学部健康科学紀要』5、1992年、15 - 31頁など）。ただし中村の研究は舞踊学の見地から阿波踊りの連の踊りの多様性を指摘したもの、もしくは新聞記事によって戦後の阿波踊りの変化を跡づけたものであり、社会集団としての連という視点からのアプローチではない。

(3)徳島の阿波踊りについてではないが、高円寺阿波おどりを社会学的な視点から調査・分析した松平誠「非伝統的都市祝祭－高円寺阿波おどり」（『都市祝祭の社会学』有斐閣、1990年、241 - 320頁）は、阿波踊りに対して社会・文化論的アプローチを試みた数少ない業績の一つであり、その分析視角は大いに参考になる。

阿波踊りの主役と言えると、しばしばその対極として捉えられる学生連を取り上げ、それぞれの代表的な事例を紹介した上で、これら二つのタイプの連の社会集団としての性格の違いについて論じてみたい。

2. 阿波踊りの現在

連の社会構成や活動の実態を具体的に検討する前に、現在行われている阿波踊り、およびそこに参加している連の概況を簡単に押さえておきたい。

2-1. 阿波踊りの風景

藩制期に徳島城下で踊られていた盆踊りに由来するという阿波踊りは、毎年8月12日から15日までの4日間、徳島県徳島市で行われている。阿波踊り期間中の人出は100万人（徳島市の人口の約3倍）とも言われ、町中が踊りの熱気に包まれる。

現在、阿波踊りのメイン会場となっているのは、徳島市中心部の7ヶ所に設けられた演舞場（栈敷）であるが（図1）、そのほかにもおどり広場（4ヶ所）、おどりロード（1ヶ所）、まちかど広場（4ヶ所）などで踊りが披露されている。

演舞場の開演時間は18時～22時30分。有料演舞場（入場券は1枚1,000円）は、市役所前（全長110m、収容定員6,000人）、藍場浜（81m、5,600人）、紺屋町（104m、4,500人）、南内町（120m、4,900人）の4ヶ所に設けられている。南内町演舞場では、連日22時過ぎから有名連（阿波踊り振興協会所属15連）の合同フィナーレが行われ、最終日には200人以上の鳴り物衆が奏でる大音響の中、1,000人あまりの踊り子が乱舞する。無料演舞場は、両国本町（全長200m、3,400人）、元町（90m、800人）、新町橋（110m、1,000人）の3ヶ所にある。有料演舞場に比べて規模が小さく（いずれも3段の観覧席）、踊りを間近に見物できる。各演舞場には向かい合せの3～12段の観覧席が作られており、その間の通路に、一方の端から連が次々と踊り込み、それぞれの踊りを披露する。各演舞場には、一晩に50あまりの連が踊り込む。

阿波踊りが踊られるのは夜である。昼間は有名連による「選抜阿波踊り大会」や、全日本大学阿波踊り選手権大会・三味線流し・屋形船による邦楽演奏・姉妹都市帯広の盆踊り・沖縄のエイサー・阿波踊りヨットレースなどの関連イベントが行われている。連の中には、夜を待ちきれず、町のメインストリートである新町橋通りや東新町商店街などを踊り流している光景も見られる。

もっとも、現在みられるように阿波踊りが観光化されたのはそう古いことではなく、徳島市商工会議所が昭和4年から阿波踊りのポスターを阪神地区に配布したり、全国の鉄道駅に広告を出すなど、全市を挙げて積極的に徳島名物阿波踊りの宣伝に取り組みはじめてからのことであるという⁽⁴⁾。「阿

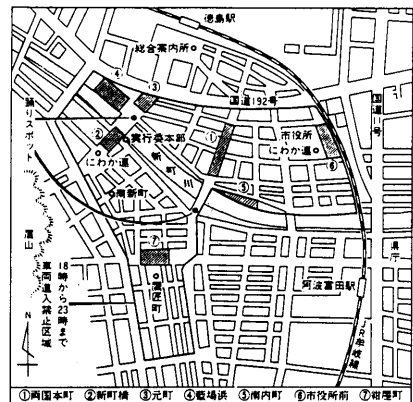


図1 徳島市内演舞場所在地
(朝日新聞徳島支局『阿波おどりの世界』220頁より)

波踊り」という名称も昭和3年に民俗芸能研究家の林鼓浪によって命名されたもので、それ以前は単に「盆踊り」と呼ばれていた。

阿波踊りがいつの時代も人々の心を捉えて放さなかったのは、その基本の「単純さ」と、その裏に潜む「奥の深さ」によるものであろう。阿波踊りの基本は、単純な二拍子のリズムと、右手右足、左手左足と交互に出す「ナンバ」と呼ばれる独特のステップである(図2)。それ以外は特に決まりは

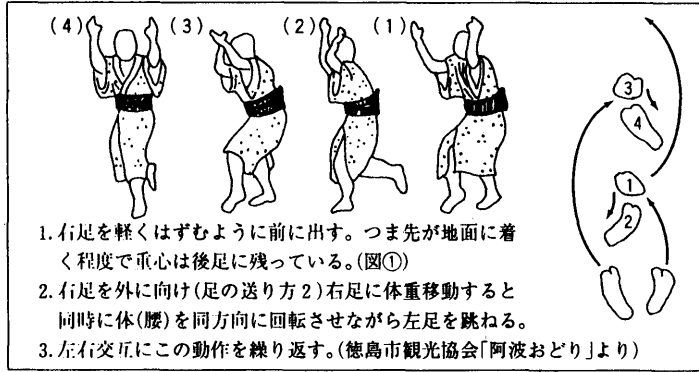


図2 阿波踊りの基本ステップ

なく、あとは個人が自由楽しく踊ればよい。工夫次第では、基本形をもとに無限の変化、バリエーションを考えることができるが、このことが阿波踊りの最大の魅力となっている。

また、阿波踊りは、「正調」をかたくなに守り続ける伝統芸能とは異なり、常にその時々新しい試みを入れ、今風の仕草とリズム

で踊り継がれてきた。大正時代には、バイオリンやマンドリン、クラリネットからハーモニカまで鳴り物に使われていた⁽⁵⁾。今では、スネアドラムやエレキ三味線を使っている連もある。踊りにしても、阿波踊りは、ロックンロール・マンボ・サンバなど、その時代に流行った踊りや音楽を敏感に取り入れてきた。このような点において、阿波踊りを現代に生きる「風流」芸能と考えることもできる⁽⁶⁾。阿波踊りが、ダンス好きな現代の若者をひきつけている理由もそこにある。

2-2. 阿波踊りと「連」

阿波踊りの踊りのグループを「連」と呼ぶ⁽⁷⁾。「若連(中)」「女連(中)」などということばに見られるように、連には本来、同じカテゴリーに属する仲間といったニュアンスがある。

阿波踊りの連は、大きく分けて踊り子(男踊りと女踊りに大別される)と鳴り物(三味線・鉦・太鼓・横笛などの楽器)で構成されている。連の規模は30人ほどの小さなものから500人あまりの大きなものまで、さまざまである。

連は、同好の人々・学校・企業・団体など、さまざまな単位で結成されている。大学生など、学生で構成される連を「学生連」、同じ企業の人たちで構成される連を「企業連」と呼ぶ。企業連の中に

(4)徳島市史編纂室編『徳島市史 第4巻 教育編・文化編』徳島市教育委員会、1993年、796頁。

(5)読売新聞徳島支局『阿波おどり物語』(教育出版センター、1974年)、三好昭一郎「鳴物の変遷・考」(『阿波おどり』2、1994年、6頁)など。

(6)趣向を凝らした山車や仮装行列、あるいは華麗な衣裳・採物の踊りを風流(風流踊)と呼ぶ。仲井幸二郎・西角井正大・三隅治雄『民俗芸能事典』東京堂出版、1981年、394頁。

(7)近世の史料によれば、阿波踊りのグループは「組」(西新町組というように)と呼ばれていた。新聞記事では明治45年頃から「連」という表現が見えるという(徳島市立徳島城博物館『阿波踊り今昔物語』同館、1997年、33頁)。

は有名タレントが参加する連もあり、特に「タレント連⁽⁸⁾」と呼ばれている。1999年度の阿波踊りには、三田村邦彦（サンスター連）、林家こん平（サントリーモルツ連）、中村あずさ（徳島そごう連）、コメディ No. 1（西日本 KSD 連）などが参加した。また、国や県、市町村などの官庁に務める人々からなる連を「官庁等関係連」と呼んでいる。

特に技術的に優れた同好の人々の連は「有名連」と呼ばれ、その踊りの上手さは際だっている。阿波踊りの主役は、これら有名連である。有名連同士は互いに強いライバル意識を持っており、踊りや鳴り物に他の連とは違った個性を出そうと、日々練習・研究に余念がない。また、その個性にひかれて新しい連員たちが集まってくるのである。

有名連の多くは、徳島県阿波踊り協会・阿波踊り振興協会・徳島県阿波踊り保存会のいずれかの協会に所属している。徳島県阿波踊り協会（徳島支部）には、葵連・うきよ連・菊水連・独楽連・娯茶平・新のんき連・殿様連・蜂須賀連・平和連・ほんま連・酔狂連・まんじ連・みやび連・悠久連・藝茶楽が、阿波踊り振興協会には、うずき連・浮助連・阿呆連・あびす連・水玉連・阿波連・ささ連・天保連・阿波鳴連・扇連・天水連・若獅子連・のんき連・新ばし連・無双連が、徳島県阿波踊り保存会には、よしこの連・編笠連・大奥連・遊銘連・大名連・阿波ためき連・阿波藍連・追独楽連・みつ花連が所属している⁽⁹⁾。もっとも中には、有名連でありながら協会に所属しない連（有名一般連）もある。

阿波踊りの連の多くは、徳島県内に本拠地を持っているが、中には神戸・大阪・東京など国内各地や、はるばる外国から踊りにやってくる連もある。これらの連を「県外連」と呼ぶこともある。

1977年、連に所属しない一般の人や観光客でも阿波踊りに参加できるようにという趣旨で始められたのが「にわか連」である。これはその名のとおり、その場でにわかになら結成され、にわか解散する、まったく一時的な連である。事前の申し込みは一切必要なく、服装は自由、参加料も無料で、阿波踊りをまったく知らない人でもその場で参加できる。参加希望者は、所定の場所（市役所前市民広場、および東新町商店街入口付近）に集まった後、有名連による簡単なレッスンを受け、演舞場に繰り出す。にわか連は、阿波踊り期間中、毎日18時30分と20時30分の2回行われている。にわか連への参加者は、例年、阿波踊り期間中の4日間で延べ2万人以上にものぼっている⁽¹⁰⁾。

阿波踊りの連の数は、年によって変化する。徳島市役所観光課の資料によると、1995年度の阿波踊りの参加連数は全部で427連（表1）、そのタイプ別内訳は、有名連（団体所属）57連（全体の13.3%）、有名一般連（団体には所属せず）18連（4.2%）、県外連14連（3.3%）、タレント連9連（2.1%）、企業連106連（24.8%）、官庁等関係連32連（7.5%）、学生連101連（23.7%）、その他（各種団体・福祉関係・町内等）90連（21.2%）⁽¹¹⁾となっている。

かつては、それぞれの地域を単位として連が結成されることが多かったという。今でも徳島市津田の「津田の盆踊り」をはじめとして、いくつかの地区に地域主体の阿波踊りが残されている。しかし

(8)企業連が自社のCMなどに起用しているタレントを呼ぶのは、もちろん企業のPRを兼ねてのことである。

(9)『阿波踊り写真集 えらいやっちゃ阿波踊り』（徳島新聞社、1996年）による。

(10)「平成7年度阿波おどり『にわか連』集計表」（徳島市役所）による。

表1 1995年度阿波踊り参加連数
(徳島市役所観光課による)

	8月12日	8月13日	8月14日	8月15日	総計
有名連(団体所属)	42	46	47	46	57
有名一般連	18	18	17	17	18
県外連	8	4	4	3	14
タレント連	6	5	4	2	9
企業連	51	31	35	14	106
官庁等関係連	16	2	14	8	32
学生連	56	54	48	61	101
その他	34	37	23	17	90
合計	231	197	192	168	427

現在では連を作る単位は地域を離れ、学校・職場・友人・同好会などというように多様化している。このように、さまざまな「縁」によってメンバーが結び付いていることが、阿波踊りの連の大きな特徴でもある。また、連への脱退・加入は基本的に

自由であり、連の間の人々の移動も頻繁に起こっている。そこには伝統的な地域祭礼に見られるような地縁的・血縁的制約、固定的な人間関係は見られない。あくまでも「個人」が単位であり、個人が自由に結びついて連ができる。そうした意味で、連はまさに都市社会特有のネットワークのありかたを反映した社会集団とすることができるのである。

続く第3節・第4節では、これらさまざまなタイプの連の中から特に有名連と学生連の事例を取り上げ、その具体的な姿を描き出してみたい。

3. 有名連のケース・スタディ

3-1. A 連の社会構成

本節では、いわゆる「有名連」の社会構成、およびその活動の実態を、A 連¹¹⁾の事例を通して見てみたい。なお特にA 連を事例として取り上げたのは、個性豊かな有名連の中でも比較的スタンダードな人員構成、踊りや鳴り物のスタイルを持った連であることによる。

A 連は、現在の連長 B 氏によって1970年代前半に創設された連で、いわゆる「有名連」の一つである。戦前に作られた連も少なくないことを考えると、連としての歴史は長くなく、むしろ新しく創設された部類に入る。

連員の数は、創設当初は約50名(男踊り・女踊り各17~18名、鳴り物15名)であったが、その後次第に数を伸ばし、現在では100名あまり(男踊り約30名、女踊り約40名、はっぴ踊り10名、鳴り物23~24名)となっている。

次に、A 連がどのような属性を持った人々から構成されているのかを見ていきたい。図3・図4・図5は、1996年7月11日にA 連の連員を対象として行ったアンケート調査の結果に基づき、連員の居住地・年齢・職業の割合をグラフ化したものである(ただし、アンケート実施当日は、ベテラン踊

(11)連における結衆原理の多様性という点を明らかにするためには、今後、この「その他」に含まれる連を詳細に調査研究する必要があるだろう。

(12)連長のご意向により、連名は仮名とさせていただきます。

り子の多くが参加していなかったことを申し添えておく。

まず連員の居住地についてみると、徳島市に住んでいる者が回答者45名中36名（81.0%）と大多数を占め、小松島市（3名）、鳴門市（2名）などの隣接市町村がそれに続いている（図3）。このことは連の本拠地が徳島市にあることを反映しているが、そのほか練習（徳島市中心部の徳島中央公園で夜に行われる）に通うのにかかる時間も関係しているものと思われる。7月に入ると土曜を除き毎晩練習が行われるため、遠方の居住者では通いきれないのである。

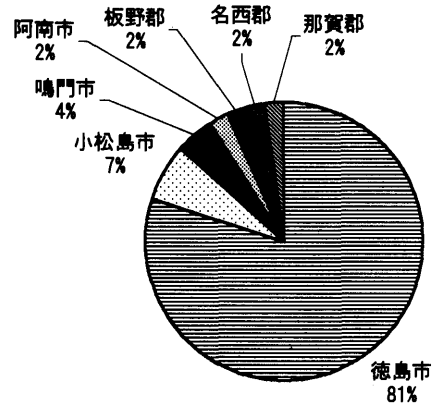


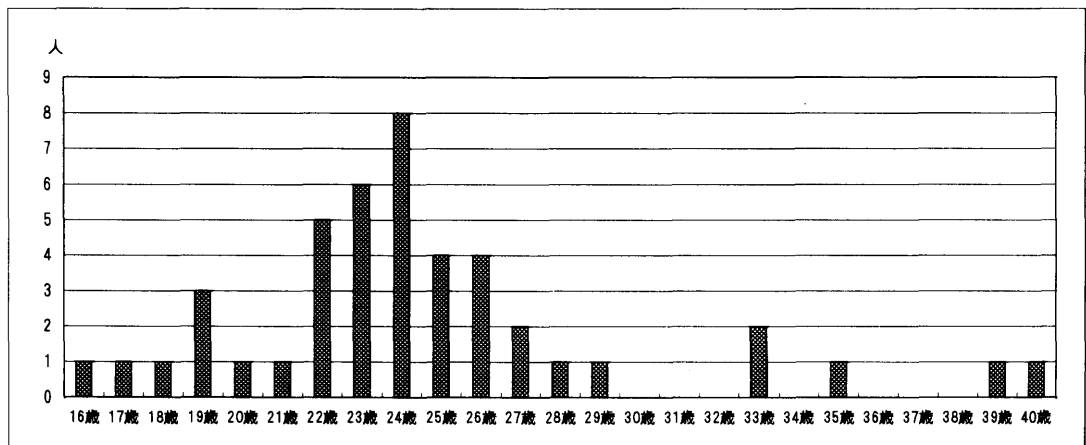
図3 連員の居住地

年齢に関しては、下は16歳から上は40歳までかなりの幅があること、その中でも20代半ばくらいのメンバーが中心となっていることがわかる（図4）。16歳未満の連員がいないのは、A連が「ちびっ子」踊り子¹³を有していないことによる。なお他の有名連も年齢構成はA連とほぼ似通っており、20～30代の比較的若いメンバーが中核を担っている。

連員の職業については、会社員が47名中28名（59.6%）と過半数を占めているが、そのほかにも公務員（7名）、学生（6名）、自営業（4名）、その他（2名）など、バラエティに富んでいる（図5）。

このように、A連は多様な居住地・年齢・職業の人々から構成されている。こうしたメンバーの社会的属性の多様さという特色は、他の多くの有名連にも当てはまることである。

図4 連員の年齢



13「ちびっ子」は、はじめ阿波踊りの後継者養成のために設けられたものだが、最近ではこの「ちびっ子」を売り物にしている連もある。水玉連の「水玉ちびっ子」には小学生になると正式に入れる。「ちびっ子」20人あまりが、テンポのよい鳴り物に合わせて提灯片手に左右に大きく踊る「横飛び踊り」が売りである。中学生になると「ちびっ子」を卒業して、大人の連員の仲間入りをする。

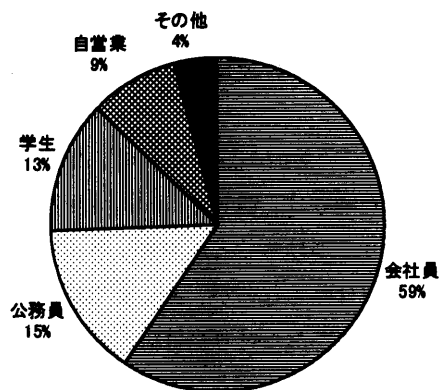


図5 連員の職業

きであれば誰でも参加することができる、出入り自由の開放的な集団なのである。一方、学生連・企業連などは、特定の社会集団(学校もしくは企業)に属していることが、連のメンバーシップの前提となっている。

3-2. 天水への道—入連の動機

「天水」とは、おめでたくて調子よく、一つのことに熱中しやすい人のことを指す阿波のことばであるが、特に天から雨が降ってきて踊り続けるくらい踊りが好きな人たち、すなわち阿波踊りの踊り子のことをこのように呼ぶことが多い。ここでは、A連の連員たちがどのような経緯で天水となるに至ったか(入連の動機)を、これもアンケートの結果に沿って述べていきたい。

連員の多くが「女踊り(男踊り)をしたかったから」「鳴り物演奏がしたかったから」ということを入連動機に挙げているが、女性の中には衣装の優美さから、その衣装を着てみたいということが動機となっている人もいた。男性の中には「格好いいから」という回答もあり、どこかの有名連に入って阿波踊りの晴れ舞台で見事な踊りを披露することが、徳島の、特に若い人たちには一種のあこがれ・目標になっていることがうかがえる。

それでは、数ある連の中でなぜA連を選んだのだろうか。その多くは、個人的なネットワーク(48名中26名、54.2%)や、新聞・雑誌などのマスメディアによる情報(12名、25.0%)、あるいは実際にA連の踊りを見たことにより(5名、10.4%)A連を選択し入連している。中でも個人的なネットワークを通じての入連(具体的には他の連員からの紹介、もしくは連長の勧め)が過半数を占めていることが注目される。

なお、入連する際には自分の担当する踊り(または鳴り物)を決めなくてはならないが、A連ではこれは本人の意思に任せられ、全員が希望通りの役割につける仕組みになっている。

3-3. 連の個性

一口で阿波踊りと言っても、すべての連が同じ振り付け、同じリズムの鳴り物、同じ衣装で踊って

いるわけではない。特に有名連の場合、それぞれの連が非常に強い個性を持ち（各連はそうした個性を意識的に創り出そうとしている）、「その連らしさ」をアピールしている。こうした連の個性へのこだわりが、有名連とそのほかの連との阿波踊りのスタイルの違い、さらには連員の意識の違いを生み出す大きな要因となっている。

A 連の持つ「A 連らしさ」は、何よりもその踊りの振りに表れている。A 連の踊りは、全体的に動きの大きな振り付けとなっている。その中でも A 連の華である女踊りは、激しく華麗に見せるために腕の振りを大きくし、腕を伸ばしたときと縮めたときのメリハリをつけることが重要なポイントとなっている。また、足の動きも手の動きに合わせて大きくしなければならぬが、あくまで品のよさを失ってはならない。指先の動きも大切に、柔らかく、しかもしなやかな女踊りには欠かせない振りである。A 連の女踊りは、激しく踊りながらも女らしさや上品さを漂わせる踊りである。

それに対し、男踊りは豪快でスピンの効いた力強い振り付けである。体の中心を軸とし、腰を低く落とした姿勢での力強い足さばきや腕の振り、右手に持った提灯を器用に回しながら踊る様子は非常にたくましい踊りで、女踊りと対照的である。また、女性による男踊りである「はっぴ踊り」は若い女性にたいへん人気がある。その振りは基本的には男踊りと同じ振り付けであるが、手には何も持たずに踊る。はっぴ踊りは元気で活きの良いのが持ち味であり、豪快な振り付けでありながらも、どこか女性のかわいらしさや小粋さを感じさせる。

これらの踊りを支えているのが A 連独自の鳴り物のリズムであり、これがなければ A 連らしい踊りは成り立たない。A 連の鳴り物は他の連に比べてアップテンポでノリがよいのが特徴である。踊りに比べて鳴り物は目立つことが少ないが、連の中でもっとも技術とキャリアが必要となり、A 連では連長自らがその指揮を執っている。

また、踊りの美しさをさらに引き立てる衣装は、女踊りは白地に濃いピンクの浴衣に真っ白な蹴出し、男踊りとはっぴ踊りは茶色のはっぴに白い踊りパンツとさらしである。あまり多くの色を使わず、全体的に上品な美しさを醸し出す衣装である。決して派手ではない衣装であるが、それゆえに A 連の踊りがストレートに伝わってくる。

そして、阿波踊り本番の演舞場やステージでは、阿波踊りを単調なものにせず、観客を飽きさせないために、配列を変えたり、連員が集まったり散らばったり、ポーズを取ってストップしたりといった、さまざまな趣向を凝らした演出をする。演出は演舞場やステージで A 連の良さや個性を充分発揮し、見てくれる人たちが楽しんでくれるようにと考えられたものである。

以上のような点において、A 連は他の連とは異なる個性を持っており、またそうした個性を非常に大切にしている。阿波踊りになじみの薄い人にとっては、どの連の踊り・鳴り物も同じように感じるかもしれないが、連にはそれぞれのカラーがあり、それを表現する方法にも細かい工夫が凝らされているのである。もちろんこうした連の個性、その連らしさというものは一朝一夕にできあがるものではなく、連の創設から長い時間をかけて築き上げられていくものである。

3-4. 連の活動

3-4-1. 連の年間活動

A連の一年を通じての活動で連員のほぼ全員が集まるものは、8月12～15日の阿波踊り期間中に集中しており、この間に演舞場での阿波踊りや「選抜阿波踊り」に出演する。「選抜阿波踊り」は徳島県郷土文化会館と徳島市文化センターで8月12日から15日まで開催されているが、これは徳島県阿波踊り協会と阿波踊り振興協会のそれぞれに所属している連の中から特に優れた連が選ばれて出演するものである。また、8月11日に徳島市文化センターで行われる「阿波踊り前夜祭」にも出演するが、これには入連2年目以上の人だけが参加する。これ以外にも、「阿波踊りふれあい広場」や「よんでん阿波踊り広場」など演舞場のないところでも踊りを披露し、観客に喜ばれている。

また、阿波踊り期間以外でも連の活動は続けられ、さまざまな機会に阿波踊りを披露している。中でももっとも重要な活動が「毎日踊る阿波踊り」への出演である。これは4月1日から7月20日までの間と、9月1日から11月30日までの間、徳島駅前のアミコビル内にあるシビックセンターで催されるもので、徳島県阿波踊り協会と阿波踊り振興協会のそれぞれに所属している有名連が毎日交替で出演するが、A連はこれに月1回出演している。ほかにも、年1、2回県外遠征をしたり、ときにはホテルに招かれて阿波踊りを披露することもある。しかし阿波踊り期間以外の活動には、必ずしも連員全員が集まるわけではない。

3-4-2. 練習

A連全体の練習は5月の大型連休が終わってから始まる。練習場所は、徳島市の中心部にある徳島中央公園である。練習は夜の7時から9時までの2時間で、5月から6月いっぱいまでは毎週火曜と木曜、7月に入ってから阿波踊りが始まるまでは土日曜以外毎晩行われる。

練習は、女踊り・男踊り・はっぴ踊りがそれぞれの場所に集まり、一つの鳴り物の音に合わせて20分踊っては10分休むということを繰り返す。新人は先輩の連員が指導するが、その際には年齢は一切関係なく、技術のある者が教えるという形になっている。踊りの上達する速さには個人差があり、先輩の人たちは一人一人の上達ぶりに合った教え方をしなければならない。また新人は自分の手本とする先輩の踊りを観察して自分の踊りと比べたり、鏡の前でまねをして踊ったりして、A連らしい踊りを覚えようとする。

阿波踊りの練習でまず覚えなければならないのが、足のリズムの取り方である。阿波踊りのリズムは二拍子で、最初は足を揃えてかかとでリズムを取る練習をするのだが、簡単そうに見えてこれはなかなか難しい。

リズムが取れるようになったら、次はステップを踏む練習をする。まずは足だけの踊りをできるようにして、その後で手の振りだけの練習をし、先に練習した足の振りと手の振りを合わせるようにする。そして一人一人の踊りが形になってきてから、全員で踊る練習や、演舞場での演出の練習などをし、踊りを演舞場やステージで人に見てもらえるものへと磨き上げていく。「個人の踊り」を「連の踊り」にするのである。

このような練習は阿波踊り期間の直前まで続けられ、ほとんど休みはない。見た目以上にハードな

阿波踊りの練習を、夜とは言え、6月や7月の暑い時期に2時間続けて踊るにはかなり体力がいる。それでも阿波踊りに魅せられた天水たちはそれを苦ともせず、練習に励んでいる。このような練習があつてこそ、A連らしい、高い技術をもった踊りを観客に楽しんでもらうことができるのである。

3-4-3. 阿波踊りの日

練習の成果を発揮できる阿波踊り期間は、8月12日から15日までの4日間である。A連の連員たちはこの期間を心から楽しみにしており、この4日間のために一年の残り361日があると言い切る連員がいるほどである。

先にも述べたように、この期間におけるA連の主な活動は、演舞場での阿波踊りと、選抜阿波踊りへの出演である。1996年度の選抜阿波踊りへの出演は8月12・13日の2日間であった。12日は徳島県郷土文化会館で3回、13日は徳島市文化センターで2回の公演を行った。公演が終わると演舞場に繰り出すのが、これからは阿波踊りのもっとも楽しい時間である。

演舞場で踊る場合には、企業連の人たちと一緒に踊ることも多い。衣装の着付けや鳴り物の演奏でお手伝いもする。演舞場での演出は、企業連の人たちが一緒のときと、A連だけのときでは違いがある。企業連と一緒にするときには少し簡単なものにし、A連だけの場合は観客に踊りをじっくり見てもらえるように複雑な演出にする。

1996年8月15日のA連の活動を例に見てみよう。この日の予定は「よんでんプラザ」でのふれあい阿波踊りと、阿波踊り広場での阿波踊り、演舞場での阿波踊りであった。この日、連員は着替えを済ませた後、所定の集合場所に15時に集まり、その後「よんでんプラザ」に移動した。A連の出番は17時30分である。ここでの踊りが済んだら次は演舞場と、阿波おどり広場での阿波踊りである。この日はある企業連と一緒に市役所前と紺屋町の演舞場で踊り、その後企業連の人たちと別れてから阿波おどり広場と藍場浜演舞場で、A連だけで踊った。22時過ぎには藍場浜演舞場での踊りが終わり、A連の阿波踊り期間中のすべての活動が終了した。しかし、まだまだ踊り足りない連員はその後も踊りに繰り出す。このときの踊りは観客に見せるためのものではなく、自分たちが楽しむためのものである。

4. 学生連のケース・スタディ

4-1. 学生連の多様性

学生（大学生）によって構成される連を学生連と呼ぶ。学生連の場合、複数の大学にまたがって連が結成されることは稀で、単一大学の同じ学科・教室・サークルなどを単位として連が結成されることが多い。徳島市役所観光課が作成した資料によれば、1995年度の阿波踊りに参加した学生連の数は、徳島大学45連、そのほかの地元大学（四国大学、徳島文理大学など）13連、県外の大学43連の計101連であった。

県外の大学連の場合、徳島県出身者がイニシアチブを握っている場合が少なくない。例えば早稲田大学連の母体は徳島県人会である。徳島県の代表的な文化と言え、まず阿波踊りが挙げられる。こ

の阿波踊りという徳島県人の共有文化（徳島県人のエスニック・アイデンティティのシンボル）を軸として県人会がまとまっていこうとするのは、ごく自然な成り行きであろう¹⁴。阿波踊り期間がちょうどお盆の帰省時期に重なっているということも、県人会で阿波踊りを踊るのには好都合である。

県外連、特に首都圏から来ている連の中には、東京の高円寺阿波おどりの影響を受けている連も少なくない。日本大学青二才連は最初高円寺阿波おどりに参加しており、そこから徳島の阿波踊りにも参加するようになった。なお、青二才連の指導をしているOBが徳島県出身ということも、阿波踊りがこのサークルの活動に取り入れられる一つのきっかけとなったものと思われる。

学生連と言うと、練習をしない・下手といったイメージが強いが、中には四国大学連のように、有名連とまではいかないにせよ、本格的な練習を積んでかなりのレベルにまで到達している連もある。しかしその一方で、練習不足のため鳴り物も踊りもまったくバラバラという連もある。自分たちが楽しめればそれでよいという連と、楽しむだけではなく、人に見せる技を追求したいという連とでは、阿波踊りへの取り組み方が異なってくるのは当然であろう。学生連の中には、毎年阿波踊り期間中に藍場浜演舞場（藍場浜公園）で行われる「全日本大学阿波踊り選手権大会」¹⁵に出場し、入賞を目指すものもある。

表2は、いくつかの学生連について、構成員・練習・踊りの形態などをまとめたものである（いずれも1996年度全日本大学阿波踊り選手権大会の出場連）。この表からわかるように、一言で学生連と言っても、実際には連によってその性格がさまざまであることがわかる。

早稲田大学連は、阿波踊り直前に結成され、終了後速やかに解散する。練習にもそれほど時間を割いていない。とりあえず県人会のメンバーで楽しく踊ることが目的で、技術の追求や大会での入賞と

表2 大学連の構成・活動

連名	構成員	踊りの練習	指導・踊りの形態	服装	人数
四国大学連	阿波踊り研究会 + 夏休み前に参加者募集。	5月から週3回。2週間前から毎日。	上級生が指導。できるだけ基本に忠実に。	毎年同じ。	約20人
徳島文理大学薬友連	大学のサークル（飛び入り参加可）	4、5月から開始。4～6月は週1回、夏休み中は毎日。	蜂須賀連による指導。基本形は従うが、構成は連長のアイデア。	1996年度に新たにはっぴを作成。	約30人
徳島大学土木建設連	学科・クラスのメンバー	7月から開始、週5回。	大学院修士1年が指導。	毎年同じデザインの着流し。	約70人
日本大学青二才連	大学のサークル	5月から開始。2週間に1回、3～5時間。	OBが中心に指導。型にはまらず、毎年変わったものを考え構成。	青を基調としても。2種類あり好きな方を着る。	約40人
早稲田大学・慶応義塾大学合同連	大学の徳島県人会。連は阿波踊り直前に結成、終了後に解散。	大会直前。	3年生が中心に指導。踊りは基本形を取り入れ、毎年引き継がれている。	毎年同じ。	約25人

(14) 星野命「民族的帰属意識—エスニック・アイデンティティの任意性」(綾部恒雄編『文化人類学』2、アカデミア出版会、1985年、34-45頁)。

(15) 全日本大学阿波踊り選手権大会は1987年に始まり、以後毎年行われている。1996年度は8月13日13時から藍場浜演舞場で行われた。参加連の数は、例年5～10連ほどである。

いったことはあまり考えていないようである。学科・クラスの有志で構成された徳島大学建設工学科連も同様で、普段教室で顔を合わせているメンバーと一緒に楽しく阿波踊りを踊り親睦を深めるということに主眼が置かれている。ここでは連が主体というより、あくまでも県人会、あるいは学科・クラスの方が主体となっている。現在の学生連の主流は、こうしたタイプの連である。

日本大学青二才連は「BLUE TWO ABILITIES」という大学のサークルであるが、普段は阿波踊りに限らずいろいろなスポーツに挑戦している。青二才連としての活動を始めるのは阿波踊りの直前であり、阿波踊りが終わればまた他のスポーツに励むことになる。阿波踊りはあくまでもサークル活動の一環である。しかしながら「個性あふれるフォーメーションと元気いっばいの踊り」を売り物とし、型にはまらず毎年変わったものを考え、構成する青二才連は、基本型を踏襲する他の学生連に比べると強い印象を与える（しかし有名連から見れば、結局、連の顔である「型」のない連という評価が下されることになる）。

徳島文理大学薬友連は一応サークルの形態を取っているが、サークルのメンバー以外でも飛び入りで参加することができ、ある程度外部に開かれた連であると言える。同連の踊りの練習は次に述べる四国大学連と同様にかなりハードであり、仲間で踊りを楽しむことはもちろんだが、技術を磨いて大学選手権で入賞を果たすことも大きな目標となっている。踊りの指導に有名連の一つである蜂須賀連の人を招いているという点でも、同連の阿波踊りに対する強い意気込みが感じられる。地元の学生連であることに対する自負もあるだろう。

数ある学生連の中でもっとも厳しさを感じるのが四国大学連である。四国大学連は、多くの大学連のように阿波踊りの直前に結成され、終了後に解散するという流動的な集団ではなく、「阿波踊り研究会」という阿波踊りだけを目的として恒常的に活動しているサークルが母体となっている。練習も十分な時間をかけて行っており、学生連の中でも水準が高く、もっとも美しいフォーメーションの踊りを披露している。大学選手権では毎回のように入賞を果たしており、そのことがまた、次の大会に向けての連員たちの励みにもなっている。

以下、学生連の一例として、四国大学連の阿波踊りに対する取り組みを紹介する。

4-2. 四国大学連の社会構成

四国大学連は、学内の「阿波踊り研究会」というクラブのメンバー（1996年8月現在20名）と、それ以外の学内メンバーから構成されている。クラブ員は連の中核で恒常的メンバーであるが、それ以外のメンバーは阿波踊りや学園祭の前に掲示される参加者募集のポスターを見て集まってくる人たちであり、流動的である。1996年度の阿波踊りでは、クラブ員以外に125人の希望者が集まり、総勢145人の大規模な連となった。同年度の踊りと鳴り物の構成は、男踊り（男性）10名、男踊り（女性）50名、女踊り55名、鳴り物30名であった。

四国大学連には学外者は加わっていない。また大学OBも連に参加しない。同じ学校に通う学生という共通する社会的属性を持ち、年齢差もさほどないという意味で、有名連に比べ均質化した属性を持つ社会集団であるといえる。

4-3. 入連の動機

1996年12月に、四国大学連（阿波踊り研究会）のメンバーを対象に行ったアンケート（有効回答数19）の結果によると、入連の動機は次のようになっている。

- ・今まで見る側だったので、大学入学を機会に実際に踊ってみたかったから— 5人
- ・友達に誘われたから— 5人
- ・四国大学連に入っている友達・先輩から話を聞いて楽しそうだったから— 4人
- ・有名連に入る前に、少し気楽な大学連に入ろうと思ったから— 1人
- ・前から踊っていて、大学でも続けたかったから— 1人

アンケートでは連員の阿波踊りの経験年数についても尋ねたが、その回答は、半年以内— 6人、2～3年— 9人、4年以上— 4人となっており、四国大学連の連員の多くは、阿波踊り歴がさほど長くはないことがわかる。先に挙げた入連の動機と合わせて考えると、大学に入って初めて「見る側」から「踊る側」になった人が多いことがわかる。

阿波踊りのセミプロを目指す人が集まり、練習が厳しく、敷居が高そうに見える有名連に比べ、同じ大学の学生同士で、しかも初心者も多い大学連は、「気楽」で「友達感覚」で入れるところにその魅力があるのだろう。

4-4. 連の個性

学生連は、有名連に比べ踊りや鳴り物の個性というものはあまり感じられない。ただ、連の指導者の影響はある程度感じられる（蜂須賀連の指導を受けている徳島文理大学薬友連など）。学生連の場合、実際には阿波踊りの基本（とされるもの）をこなすのが精一杯で、それを元に自分たちの型を生み出すだけの余裕のない連が多い。またそうした「連の個性」に対するこだわりが有名連に比べてかなり薄く、みんなで楽しく踊れば（一応形になっていれば）それでよいと考えている人が多いようである。

四国大学連の場合、踊りのスタイルは先輩→クラブ員→そのほかのメンバーへと上の代から伝えられてきたものであり、大きな変更は加えられていない。新しい踊りや鳴り物のリズムを創り出すよりは、連の伝統を引き継ぐことに重点が置かれている。

大学選手権に出場する連などは、それが採点の対象になる関係から、ある程度、見せるための演出を工夫している。四国大学連では、大学選手権ではさまざまなフォーメーションを取り入れ、美しさを重視している。もっとも選手権以外で踊るときは、流すだけで細かい動きはない（隊列が4列→3列→2列へと変化する程度）。

4-5. 連の活動

四国大学連（阿波踊り研究会）の主な年間活動は、下記の通りである。

4月 入学式後、クラブ紹介を行う。このとき入部した人のみ、正規のクラブ（阿波踊り研究会）員となる（約20名）。

5月 阿波踊り参加者の募集ポスターを掲示。正規のクラブ（阿波踊り研究会）員以外にも参

表3 四国大学連のメンバー構成（単位：人）

	男踊り（男）	男踊り（女）	女踊り	笛	三味線	締太鼓	大太鼓	鉦
大学選手権	4	12	16	4	3	4	2, 3	2, 3
その他の機会	10	50	55	鳴り物合計30（楽器配分不明）				

加を呼びかける。学年に関係なく、初心者も参加可能である。1996年度は女踊りだけでも50人あまりが集まった。掲示後1週間くらいで申し込みを締め切り、ゴールデンウィーク明けに希望者を集まってもらう。

8月中旬 阿波踊り参加（12・13日のみ、夜に踊る）、全日本大学阿波踊り選手権大会出場。

10月中旬 大学地元の応神町民運動会にゲストとして出場。クラブ員で都合のつく者が参加する。

10月中旬～下旬

学園祭での阿波踊り参加者の募集ポスターを掲示。学園祭の2週間前に掲示するが、募集から本番までの期間が短いので、参加できるのは経験者（阿波踊りのための夏休み練習に参加したメンバー、またはそれ以外でも阿波踊りを踊ることができる人）のみ。

11月上旬 学園祭で阿波踊りを披露。

出場メンバーは、大学選手権と、そのほかの機会（阿波踊り、学園祭など）とで異なってくる（表3）。大学選手権では入賞を目指し、とくに選抜されたクラブ員を中心にチームを編成する。そのほかの特に賞に関係のない機会には、クラブ員以外のメンバーも含めて全員が参加できる形になっている。

他の学生連に比べ、とりわけ四国大学連のフォーメーションが美しく、技術的に優れているように見えるのは、ひとえに練習の賜物であろう。阿波踊りに向けての練習は、ゴールデンウィーク明けから毎週月・水・金曜日の昼休みに行われている。この昼休み練習の習慣はクラブに代々伝わっているものである（放課後はアルバイトなどで集まりが悪いので）。4回以上練習を無断欠席した場合には名簿から削除されるが、このことは入部の際にあらかじめ伝えてある。熱意のある者だけがメンバーとして残ることができるのであり、またそのような規律があることにクラブ員はみな誇りを持っている。阿波踊りの2週間前からは1日おき、1週間前からは毎日、1時間半から2時間の練習を行う。大学選手権に出場する者は、さらに1時間半から2時間余分に練習をする。

応神町民運動会に向けては特に練習を行っておらず、適当に学園祭のフォーメーションを使う。

学園祭に向けての練習は、2週間前から毎日昼休みに行い、3、4日前からはそれに朝練習が加わる。

以上のように、夏の阿波踊り参加とそれに向けての練習、秋の学園祭参加とそれに向けての練習が連の活動の中心となっていることがわかる。他大学の連の活動は夏の阿波踊りに向けての練習に集約されており、短期間に限られているが、四国大学の場合、夏から秋という、かなり長い期間にわたって活動が行われていることが特徴的である。

5. 小結

以上、現在行われている阿波踊りの輪郭と連の概要を把握した上で、特に有名連・学生連についてその社会構成や活動の実態を記述してきた。

有名連は、多種多様な社会的属性を持ったメンバーから構成されているのが特徴である。阿波踊りが好きでさえあれば、性別・居住地・年齢（下限はあるが上限はない）・職業などを問わず自由に加入することができる。その意味で、有名連は開放性の高い社会集団と言える。一方、学生連は特定の大学の、場合によってはさらに特定の集団（学科・ゼミ・部活動やサークルなど）に属していることが加入の前提となっており、メンバーシップはかなり限定されている。

また、社会集団という点から有名連と学生連を比較した場合、有名連は「阿波踊りを踊ること」だけを目的として結成された機能集団であるのに対し、学生連（企業連も同様であるが）の多くは、何らかの目的を達成するためにすでに結成されている機能集団（大学の学科・教室・サークルなど）をそのまま連に移行させた集団であるという違いもある（ただし四国大学連などの場合は、阿波踊りを踊ることだけを目的としてとくに結成されたサークルという点で、集団の目的・機能という面では有名連に近い位置づけとなる。このことについては後述する）。学生連や企業連の場合には、阿波踊りを踊ること自体よりも、阿波踊りを通じて、クラス、サークルや会社といった既存の社会集団の連帯を強めることに重きが置かれているようである¹⁰⁾。そのため、阿波踊りを極めようという心構えもさほど強くみられない。多くの学生連・企業連にとって、阿波踊りは、集団の目的と言うより手段（具体的には集団の統合、企業のPRなどのための）なのである。

しかしながら、本文でも指摘したように、学生連と言っても集団の志向性によって両極のタイプがある。すなわち、たとえ踊りは下手であっても自分たちが楽しめればそれでよいという連（現実にはこちらのタイプの方が多い）と、楽しむだけではなく、さらに技を追求しようとする（できるだけ上手に踊ることを目指す）連である。

後者のタイプに属する連は、教室やサークル（阿波踊りを直接の目的としないもの）といった既存の社会集団を母体とするというよりは、学内の阿波踊り好きの有志が集まってできた学内サークルという形を取っているものが多い。阿波踊りを踊るといふ一つの目的を持ってメンバーが集まってきているために、学生連とは言いながらも志向性としては有名連に近いものとなり（すなわち「見せる」要素が増大し）、普段の練習もかなりシビアなものとなっている。

とはいえ、学生連には有名連にない、アマチュアとしての「気軽さ」がある。学生連は有名連のように、周囲から高い踊りの技術を期待されることもない。「学生連」というカテゴリーに属する（選り取る）ことによって、連員たちは力を抜いて阿波踊りを「楽しむ」ことができるのである。

一方、有名連は阿波踊りを踊るための集団であり、いわば阿波踊りのセミプロである。さまざまなタイプの連の中から有名連への所属を選択するということは、同時に阿波踊りの道を究める、専門的

¹⁰⁾ こうした性格は、企業連により顕著に見られる。連という集団の目的・機能という点からみれば、有名連の対極にあるのは、学生連というよりむしろ企業連であると言える。

に阿波踊りを修得するということを意味している。有名連の場合、ただ自分たちが楽しむだけではなく、「見せる」という要素が非常に重要になってくる。周囲の期待に沿うだけの踊りを見せることが、有名連に科せられた使命である。この「見せる」「楽しむ」という二つの要素の相乗作用から、技術が磨かれ、阿波踊りの基本型から無限のバリエーションが生み出され、連の個性とが紡ぎ出されていくのである。そしてそのような個性＝連の「型」の存在が連のアイデンティティを創出し、さらには連員の帰属意識を高めることにもつながっていく。

学生連のメンバーシップは、その大学の学生であることである。したがって、卒業とともに連員はその連を脱退することになる。学生連の組織・技術の不安定さは、有名連との目的意識の違いだけではなく、卒業のサイクルに合わせメンバーが常に入れ替わることにもある。一方、有名連には原則的に年齢制限（上限）がないため、何年でも連に所属し続けることができ、その中でじっくりと技を磨くことができる。こうした集団の特性が、有名連の組織的な、また技術的な安定にもつながっているのである。

本稿では連（といっても部分的な事例にすぎないが）の現在の姿を描き出すことに焦点を絞ったため、阿波踊りを取り巻く社会状況の変化と関連づけながら連の歴史的な変遷を考察するという重要な作業を行うことができなかった。これについては今後の課題としたい。特定のタイプの連（例えば企業連、学生連）の事例をさらに精緻に比較検討すれば、それぞれのタイプの連の特性がより一層明確になってくるであろう。そのほか、にわか連の位置付け、産業人類学的な見地からの企業連研究、観光化の進展と連の変容など、今後取り組まなければならないテーマは山積している。今後は、有名連・学生連・企業連・地域連、さらにはにわか連などタイプの異なった連に関する実証的な事例研究を積み重ね、それらを相互に比較検討するという作業を行う中から、少しずつ阿波踊りの全体像を解きほぐしていきたいと考えている。